

かがですか。長い受験生時代を終えて待ちわびた大学生活を迎えるというのに、なぜか気分がすぐれないという人はいませんか。そういう人がいたら、ぜひ私たちキャンパス・カウンセラーを訪ねてください。

私たちカウンセラーについては、「一般教育の手引」の「保健施設及び相談施設」というページや各学部の掲示板に貼ってあるポスターでおおよそのことがわかりますが、ここではもう少し詳しく紹介させていただきます。

広島大学では、保健管理センターの「心理相談室」に四名、総合科学部の「学生相談室」に三名、計七名のカウンセラーがいます。私たちカウンセラーに持ち込まれる相談内容は、実に多種多様です。新入生に最近目立つものをいくつかあげてみましょう。まず、転科・転学部や再受験の相談があります。とりあえず入学したものの、これからの自分の進路に不満や疑問を持っている人たちの相談です。実際には転科・転学部はかなり困難な状況にあります。私たちが一緒に考えていく中で納得できる方向が見えてくるものです。また、最近では宗教への勧誘やキャッチセールスにつきもののトラブルに巻き込まれての相談もあります。これは、親元から離れて心細い思いで過ごしている新入生が陥りやすい落とし穴です。問題がこじれないうちに早めに相談に来てください。さらに、中学生や高校生と同じように「登校拒否」を起こす大学生も少なくないのです。このような場合は、悩みを抱え

ている学生本人だけではなく、その父兄の方や友達も心配して相談に来ます。周囲が手をこまねいて見ているよりも、身近な人が私たちカウンセラーを訪ねることはとても良いことだと思います。

それでは、相談したいとき「学生相談室」と「心理相談室」のどちらを選べばよいのでしょうか。どちらも、受付ける相談内容とくに制限はもうけておりません。ですから、どちらを利用してもらうのもいいのです。ただ、興味深いことに、皆さんの先輩の利用状況をみると、学生諸君が二つのカウンセリングルームを上手に使っているようです。つまり、「学生相談室」には、転科・転学部などの「修学・進路」の相談が多いのに対して、「心理相談室」には、「登校拒否」などの「心の健康相談」が多いのです。「学生相談

室」のカウンセラーは総合科学部の教官として一般教育課程のカリキュラムにくわしく、「心理相談室」のカウンセラーは医務室・保健室の精神科医と密接に連携プレーをしていることを考えると、とても上手な利用法だと思います。

私たちカウンセラーは一人ひとりの悩みの相談に応じるだけではなく、もつと積極的に自己の内面をみつめたい人のために、「自己表現セミナー」（心理相談室）「エンカウンター・グループ」（学生相談室）などの場も提供しています。「自己開発」をめざすこのような心理学的アプローチについては、その都度案内しますので、興味のある人はぜひ参加してください。

それでは、もう一度。「応援します 君のキャンパスライフ」

エイズ感染爆発前夜の意味

教育学部家政教育学講座（児童保健学）

稲垣 稔

エイズウイルスとは

エイズは Acquired Immune Deficiency Syndrome (AIDS 後天性免疫不全症候群)

という名の疾患である。病原体は通称エイズウイルスと呼ばれている Human Immunodeficiency Virus (HIV) とらうレトロウイルスである。通常のウイルスとは異なり、この HIV は自己 RNA を逆転写酵素の存在下に直接 DNA に変換、複製していく。もともと

とアフリカのミドリサルに棲息するウイルスが起源であるという説が有力であるが、人類に根をおろしてからまだ日は浅く、一九八一年にエイズが認められ、その二年後このHIVが発見されたのである。

感染の拡大

医学の歴史の中で、ある感染症が見つかりその僅か二年後に病原体が発見されるというようなことは驚異的なことであるが、この病気がまた驚異的な速度と広がりを持って世界に蔓延した。輸送・交通機関の発達と共に、世界的規模で人的交流が容易に行えるようになったことと関連がある。従って、もし病原体の発見や感染経路の解明がもっと遅れたら、当然対策も遅れ、感染者数は現在と比較にならないほど大きいものになったであろう。現実には、世界に千二百万人以上のHIV感染者と五十〜七十万人の発病者つまりエイズ患者が存在する。アフリカからアメリカ合衆国、欧州へ、そしてアジアへと広がり、わが国においても昨年末には感染者数二千五百人、患者数五百人を突破している。

感染の経路は

血液中のリンパ球は、免疫を担当する重要

な白血球であるが、HIVはそのコントロールタワーともいうべきリンパ球（ヘルパーT細胞、CD4細胞）を標的として攻撃し、その中で増殖する。そのため免疫力が徐々に低下し、発病するとさまざまな感染症に冒され最終的に死に至る。発病まで八〜十年という長い年月を有するが、具合が悪いことにこの時期にも他者へと感染する。

他者への感染は、CD4細胞が含まれる体液によって成立する。具体的には血液、精液、陰分泌液を介して感染するが、他に母子感染がある。すなわち性行為感染であり、血液からも感染することである。唾液、汗にもきわめて微量のHIVが含まれているが、他者に感染することはない。また、蚊やダニを介しての感染もない。もし唾液によって感染するとしたら、感染者の唾液が百リットル必要であり、蚊に至っては感染者を刺した蚊が十萬匹一度に刺さなければ感染しないという程である。感染者との握手、食器の共用、入浴など通常の生活では感染することはないのである。

輸血は安全に

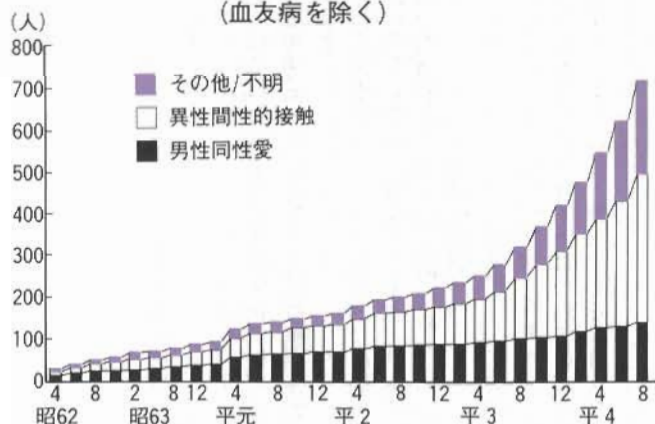
現在わが国では、輸血に用いられる血液はすべてHIV抗体陰性の確認をしてあり、この検査が始まって以来輸血によるHIV感染は一例も認められていない。血友病の治療に

用いられる血液製剤も八年前からウイルス不活化処理がなされ、新たな感染者は認められていない。

治療

治療に関しては、HIVの逆転写酵素を阻害する薬剤としてAZT、ddIなどが日本人研究者の手で開発されているが、まだ完全な特効薬とはいえない。また、ワクチンは今世紀中には完成できないであろうと予測されている。従って、現在のところ病気の進行をある程度遅らせたり様々な合併感染症を治療す

エイズ感染者の推移
(血友病を除く)



ることではできても、完治させることは不可能で、HIV 感染は死を意味することになる。

ここに悲劇の一因が存在する。すなわち恐ろしい病氣、不治の病、死病といった忌まわしいイメージが付与されてきたため、人々がHIV を恐れるだけではなく、HIV を保有した人である感染者、患者までを避けるといった過ちが生じたのである。さらに、当初アメリカ合衆国において男性同性愛者、薬物中毒患者等の限られた人々に多発したことが、誤ったイメージと偏見を与え、これらが対策を遅らせる原因にもなったのである。しかし、現在感染者の八十％は、異性間性交渉によって感染している。わが国においても図に示されたごとく、急増しているのは異性間性交渉による感染者なのである。

予防

エイズの予防は決して難しくない。何故なら HIV は手で触れたり、空気や食物から感染することはないからである。つまり性行為感染症であるエイズは、不特定多数の人と性交渉を持つこと、あるいはその様な人と性交渉を持つことをしなければ、まず、普通はかからない病氣なのである。ソープランドや海外へのセックスツアーといった性的商品化や、いわゆる性の氾濫がその感染経路の主流なのである。

感染爆発前夜

しかしながら、これは合衆国の様な感染爆発を起こした所では成り立たない。つまり、「普通の人」が「普通の人」と性交渉を持つても、感染の可能性は否定できないのである。わが国はまだ爆発的流行には至っていないが、実は、大変心配している。感染爆発へいくのか、それともこれを阻止できるのかという瀬戸際が今なのである。

心の中に予防の鍵がある

欧米ではコンドームの使用(safer sex)、十分に知り合うまで性交渉をしない(no sex)、セックスパートナーを限定する(steady sex)

医療とボランティア

「あなたには何ができるか？」

医学部附属病院原医研内科 高田 昇

エイズとともに

生きる時代

そして恋人同士の抗体検査が予防策として推奨されている。確かにコンドームは感染防止に有効であるが、それですべてが解決するわけではない。すなわち、コンドームという道具で感染を防止するだけでなく、互いに信じ合い、愛し合う関係を持つことが大切で、相手を大事にする心が抗体検査へと導いていくような関係が必要なのではないだろうか。

エイズは患者の肉体的生命を蝕むが、エイズに対する社会の偏見や差別は、感染者、患者の社会的生命を奪う。そしてその偏見や差別がある限り、感染は潜行し拡大していくことを感染爆発国アメリカが教えてくれている。感染爆発前夜といわれる今、私達に求められていることは、感染者、患者を受け入れ、彼らと共に、共生していく社会を築くことであり、私達の心の中に誤解や無理解、無関心、偏見がないか一人ひとりが見つめなおすことなのではないだろうか。

広島にエイズ患者がいないと思っはいいませんか？それは認識不足です。輸入血液製剤で感染した血液疾患の患者さんは人口比率通りいます。知らなかったとはいえ、私は大切